

港北ニュータウン遺跡群は、現在の横浜市都筑区の北側、鶴見川と早渕川はやぶちに囲まれた台地上に所在する遺跡群になります。1970年から20年間、港北ニュータウン建設に先立つ埋蔵文化財調査が行われ、旧石器時代から近世に至る268遺跡が発見されました。1317haと広大な範囲が調査対象地となり、遺跡全面が発掘調査されることで集落の全容が判明し、そのような集落間の様相や相互関係を解明することができるフィールドとして注目されてきました。

縄文時代中期の集落遺跡になると、竪穴住居跡の軒数が100軒以上検出するような事例がみられることも決してめずらしくありません。ただ、これら100軒の住居が同時にひとつの「ムラ」として機能していたのではなく、一時期、何軒かの住居が一定期間存在し、最終的に積み重なった痕跡としてとらえる視点を港北ニュータウン遺跡群を代表する集落遺跡である大熊仲町遺跡おおくまなかまちからみていきます。

港北ニュータウン遺跡群では縄文時代中期の遺構が検出された遺跡は87をかぞえ、三の丸遺跡さんのまるや神隠丸山遺跡かみかくしまるやまなど、約300～40軒の竪穴住居跡が環状にめぐり、拠点的な集落遺跡が9例みついています。一方、数軒の住居跡など、比較的小規模の遺跡も発見されています。掘立柱建物跡や土壇ほったてぼしらたてものあとなど、集落を構成する遺構やその配置をとおして遺跡間での異同を比較してみています。

また、これらの遺跡からは土器や石器など、多量の遺物が出土します。そのなかから港北ニュータウン遺跡群における在り地ではない土器型式の広がり、石鏃せきぞくなどに加工された黒曜石の産出地の傾向、土偶どぐうの廃棄などをとりあげ、遺跡間でのちがひ・交渉関係について考えてみたいとおもいます。

#### 引用文献

今村啓爾 1997 「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』同成社

小林謙一 2008 「縄文土器の年代(東日本)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

(財)かながわ考古学財団 2005『研究紀要 10 かながわの考古学』

新免歳靖・濱田翠・吉澤みな美・今井晃・芦立麻衣子・矢内雅之・吉松優希・古賀早也香・建石徹・二宮修治 2016

「付編 2 横浜市権田原遺跡出土黒曜石の産地分析」『権田原遺跡 I』(公財)横浜市ふるさと歴史財団

中村若枝 2007 「付編 第 1 節 縄文時代の動物遺存体について」『北川貝塚』(財)横浜市ふるさと歴史財団

文化庁文化財部記念物課 2016『埋蔵文化財関係統計資料 - 平成 27 年度 -』

前山精明 2004 「の」字状石製品『季刊考古学』第 89 号 雄山閣

三浦麻衣子・濱田翠・建石徹・二宮修治 2012 「付編 横浜市加賀原遺跡出土黒曜石資料の産地分析」

『加賀原遺跡・佐江戸 8 遺跡』(公財)横浜市ふるさと歴史財団

茅野市教育委員会 1990『棚畑』

横浜市埋蔵文化財調査委員会 1985『三の丸遺跡調査概報』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 VI

横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2000 『大熊仲町遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 26

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2001 『前高山遺跡 前高山北遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 29

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2003 『二ノ丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 34

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2004 『高山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 35

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2005 『月出松遺跡・月出松南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 37

(財)横浜市ふるさと歴史財団 2007 『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39

(公財)横浜市ふるさと歴史財団 2012 『加賀原遺跡・佐江戸 8 遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 45

(公財)横浜市ふるさと歴史財団 2016 『権田原遺跡 I』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 48



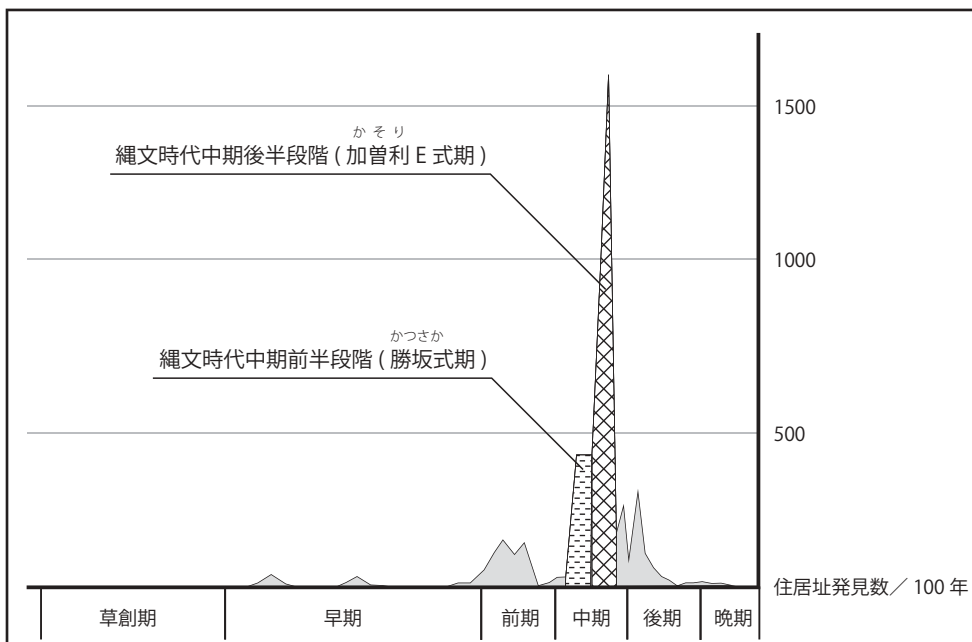
かみかくしまるやま  
神隠丸山遺跡  
全景写真

前期	十三菩提式	5600年前～
中期	五領ヶ台式	5470年前～
	勝坂式	5380年前～
	加曾利E式	4900年前～
後期	称名寺式	4420年前～

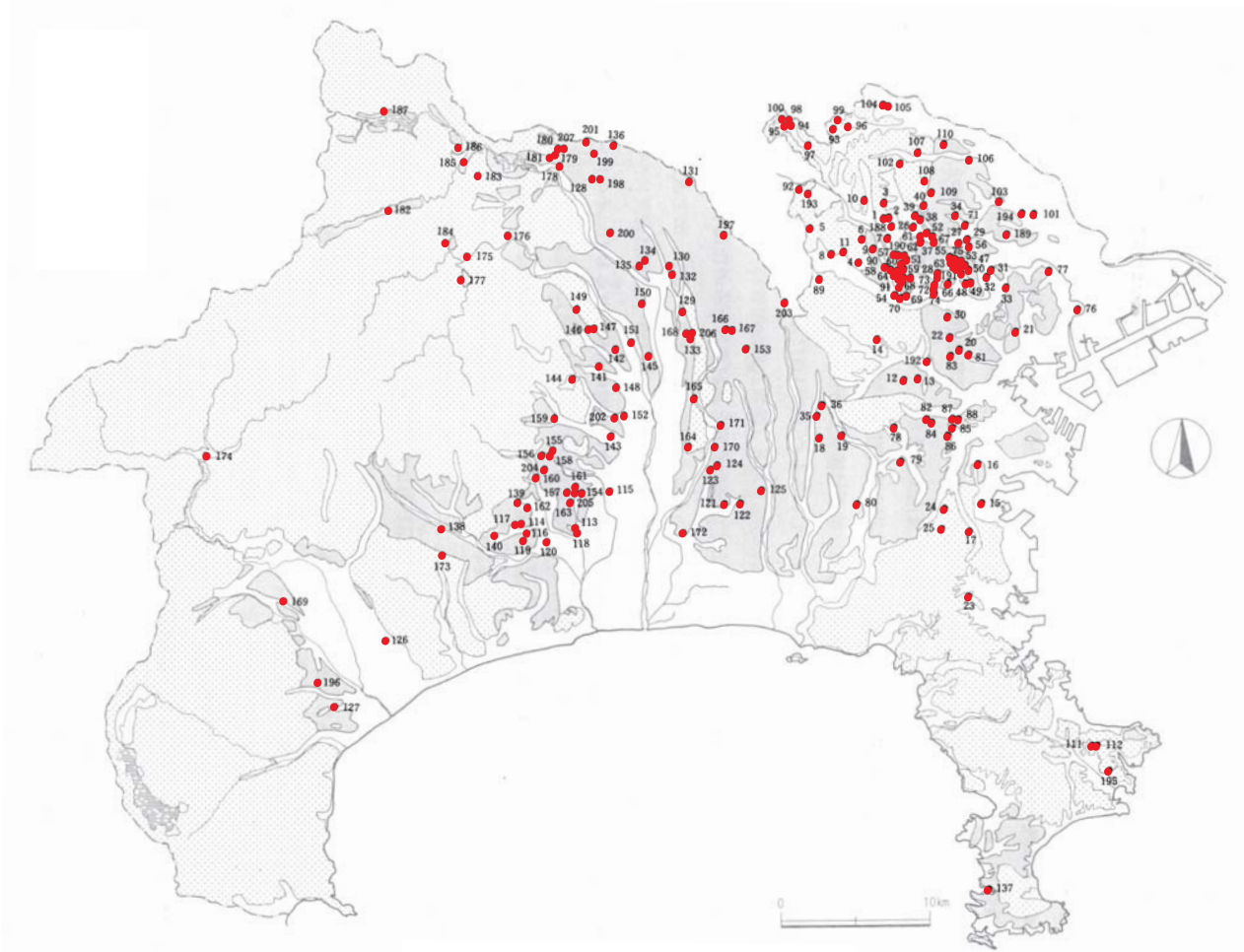


さんのまる  
三の丸遺跡 BJ54 号住居址出土土器

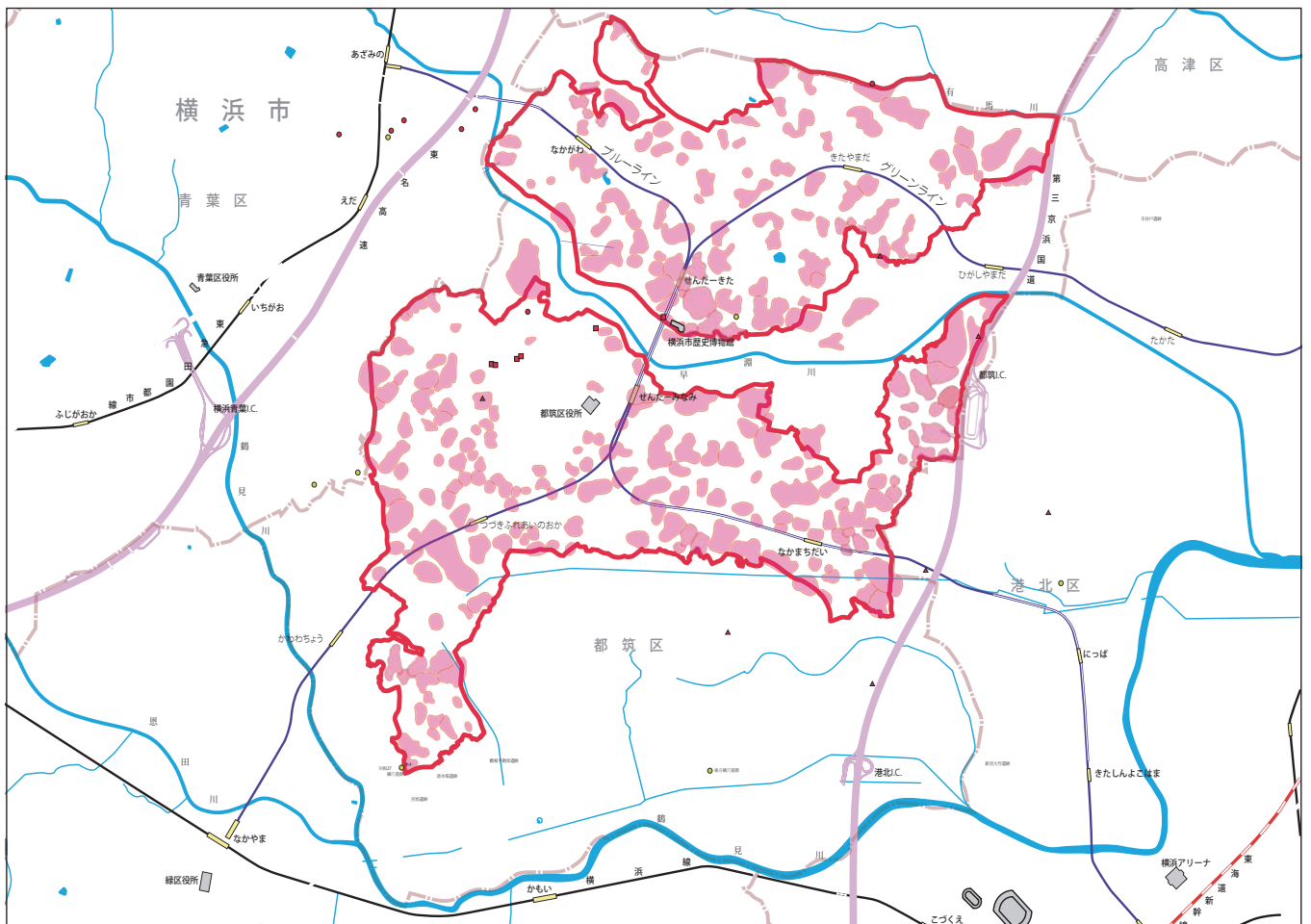
縄文時代中期の年代  
(小林 2008 をもとに作成)



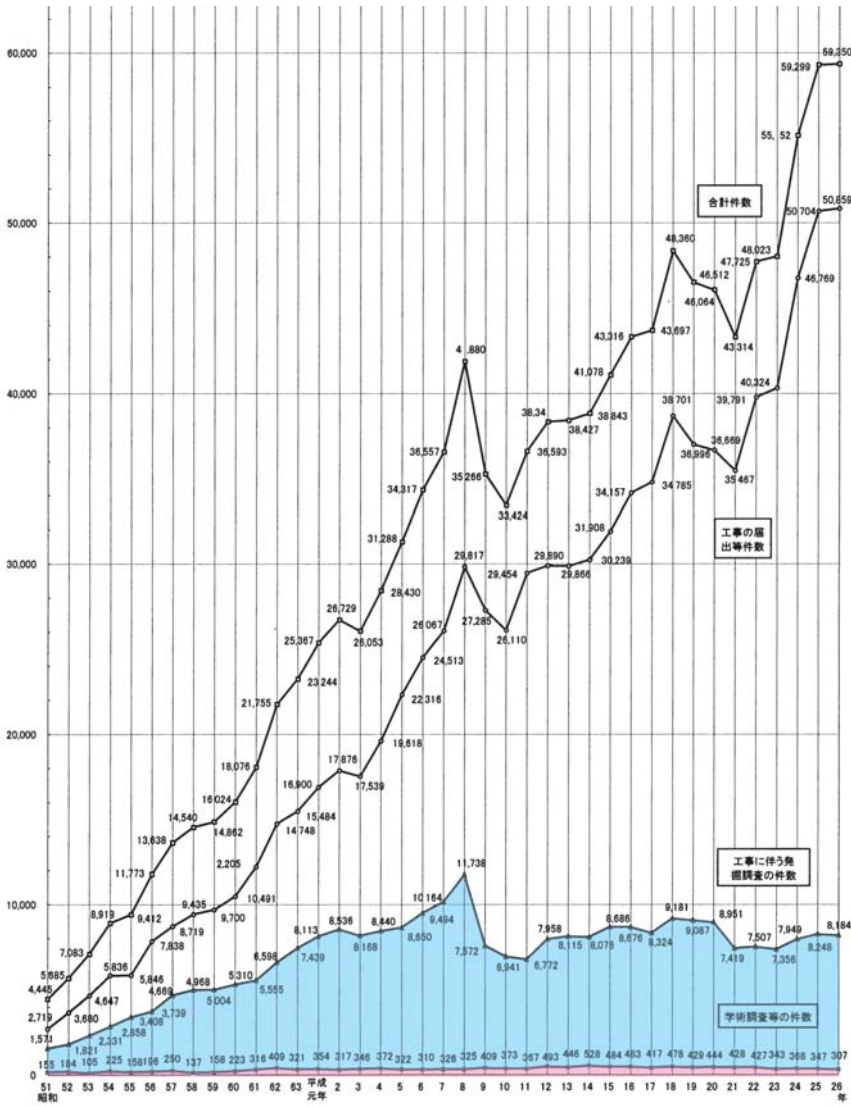
縄文時代の住居址軒数  
(今村 1997 をもとに作成)



神奈川県内の縄文時代中期後葉の主要遺跡分布 ((財) かながわ考古学財団 2005 をもとに作成)



港北ニュータウン調査遺跡分布図



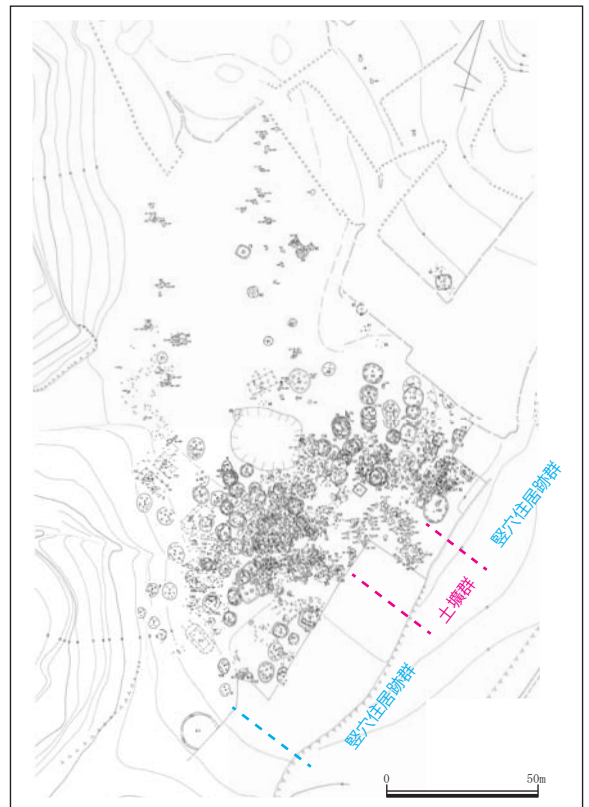
- 1970年 3月 横浜市埋蔵文化財調査委員会のもと、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団を結成(団長 岡本 勇)
- 1971年 8月 東方地区より本調査開始
- 1973年 大塚遺跡の調査開始
- 1977年 大熊仲町遺跡や二ノ丸遺跡などの調査開始
- 1978年 神隠丸山遺跡などの調査開始
- 1980年 神隠丸山遺跡が終わり、三の丸遺跡、北川貝塚の調査開始
- 1983年 三の丸遺跡の調査終了
- 1986年 大塚・歳勝土遺跡が国史跡に指定
- 1989年 6月 上の山遺跡を最後に調査終了(全遺跡数268遺跡)
- 12月 横浜市埋蔵文化財調査委員会解散
- 1990年 1月 横浜市埋蔵文化財センター発足

港北ニュータウン遺跡群  
埋蔵文化財調査略史

発掘届出等件数の推移図  
(文化庁文化財部記念物課 2016  
をもとに作成)

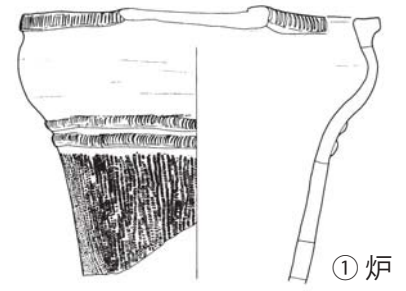


おおくま なかまち  
大熊仲町遺跡発掘調査風景

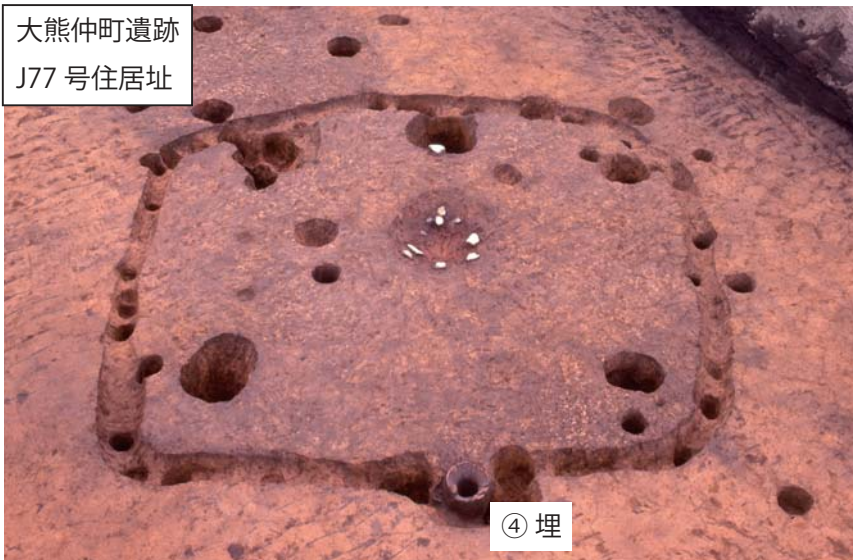


大熊仲町遺跡遺構配置図

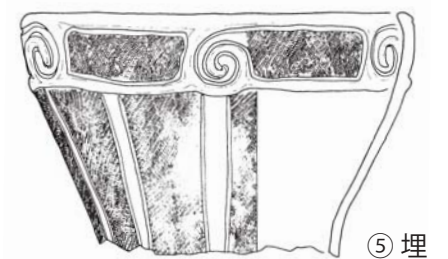
おおくま なかまち  
大熊仲町遺跡  
J3号住居址



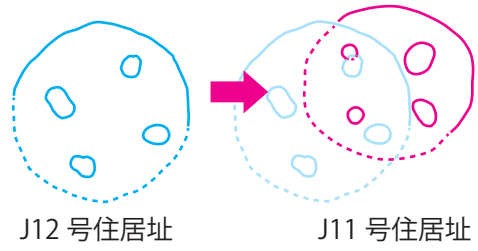
大熊仲町遺跡  
J77号住居址



大熊仲町遺跡  
J67号土壙



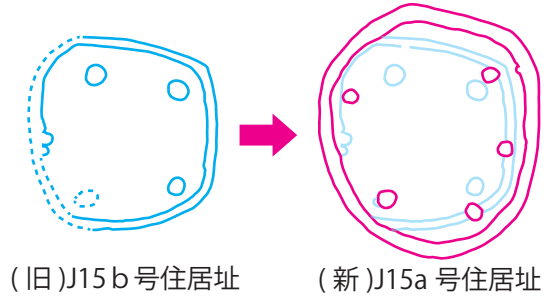
おおくま なかまち  
大熊仲町遺跡  
J11・12号住居址



J12号住居址

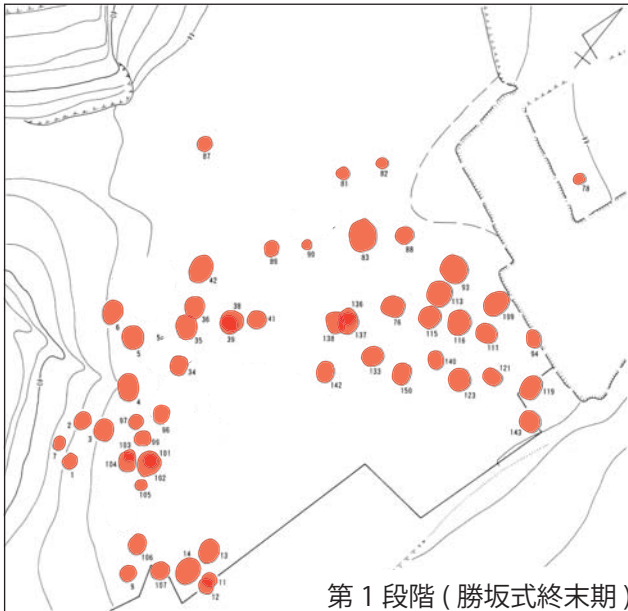
J11号住居址

大熊仲町遺跡  
J15号住居址



(旧)J15b号住居址

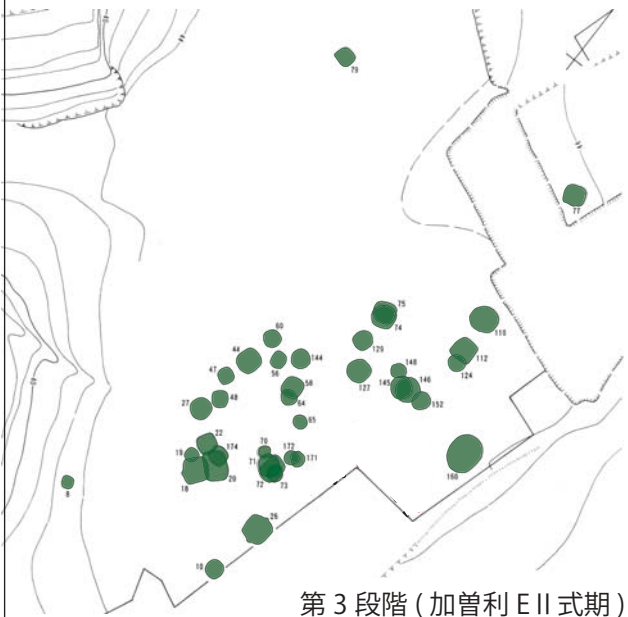
(新)J15a号住居址



第1段階 (勝坂式終末期)



第2段階 (加曾利E I 式期)



第3段階 (加曾利E II 式期)

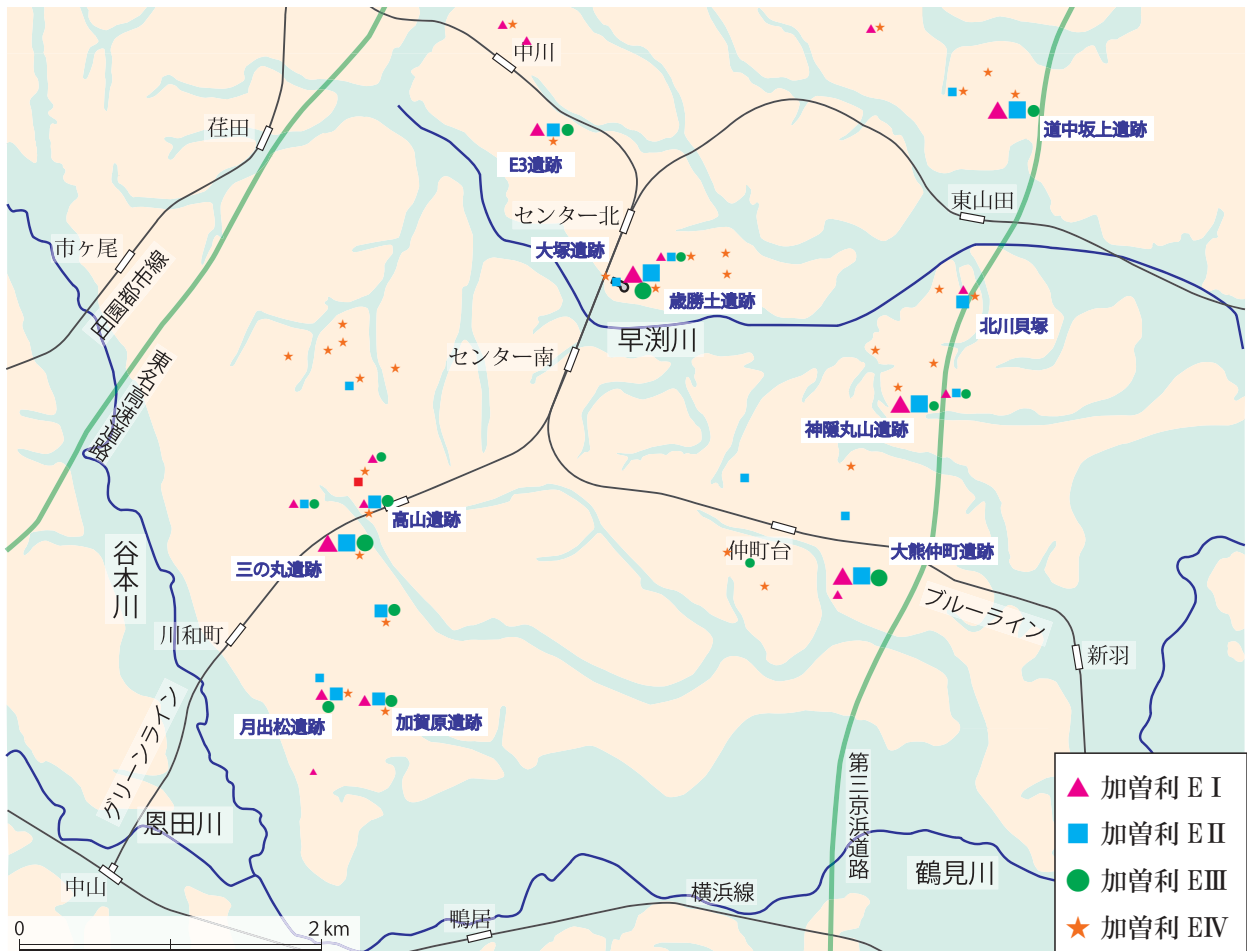


第4段階 (加曾利E III・IV 式期)

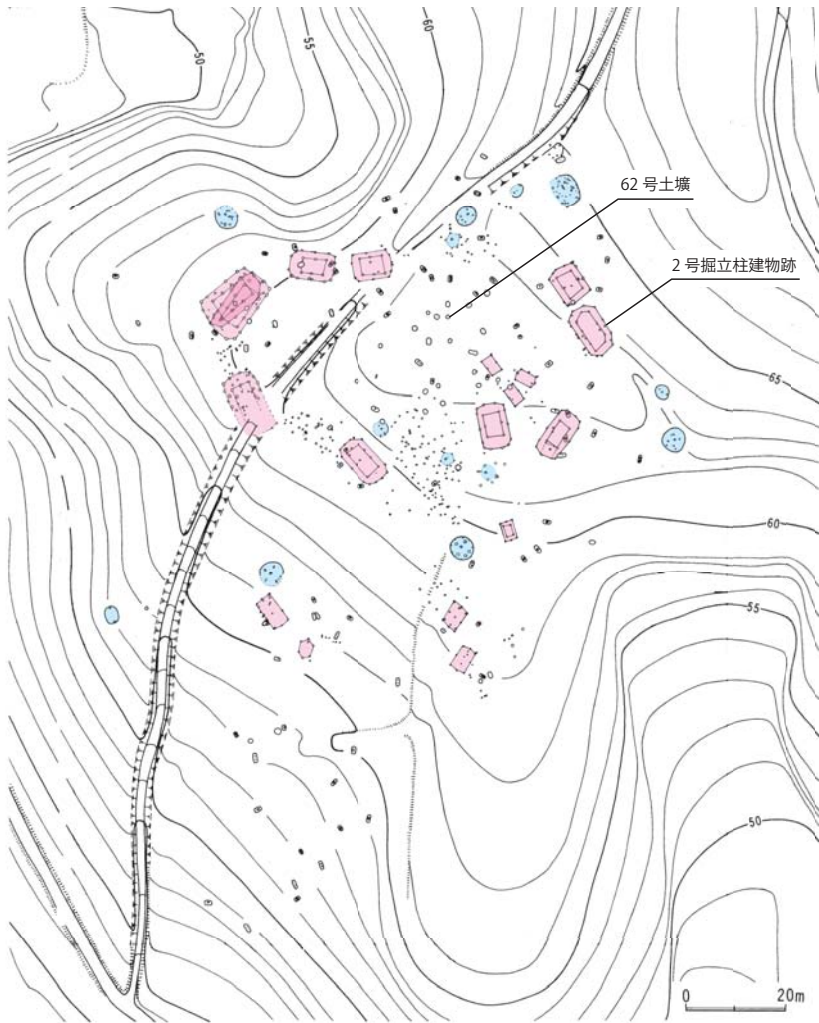
大熊仲町遺跡 竪穴住居址の時期別変遷図



縄文時代中期前半の遺跡分布図



縄文時代中期後半の遺跡分布図

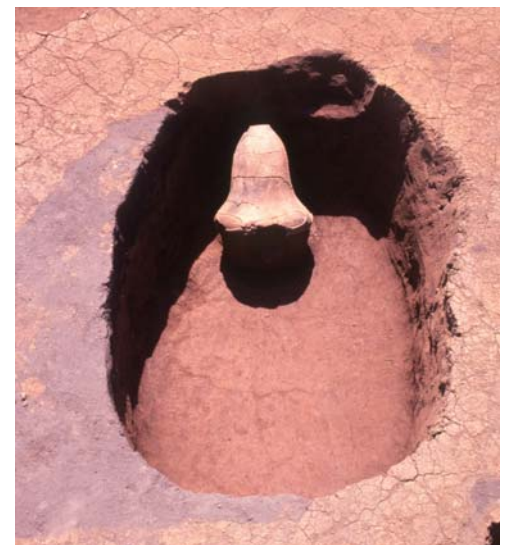
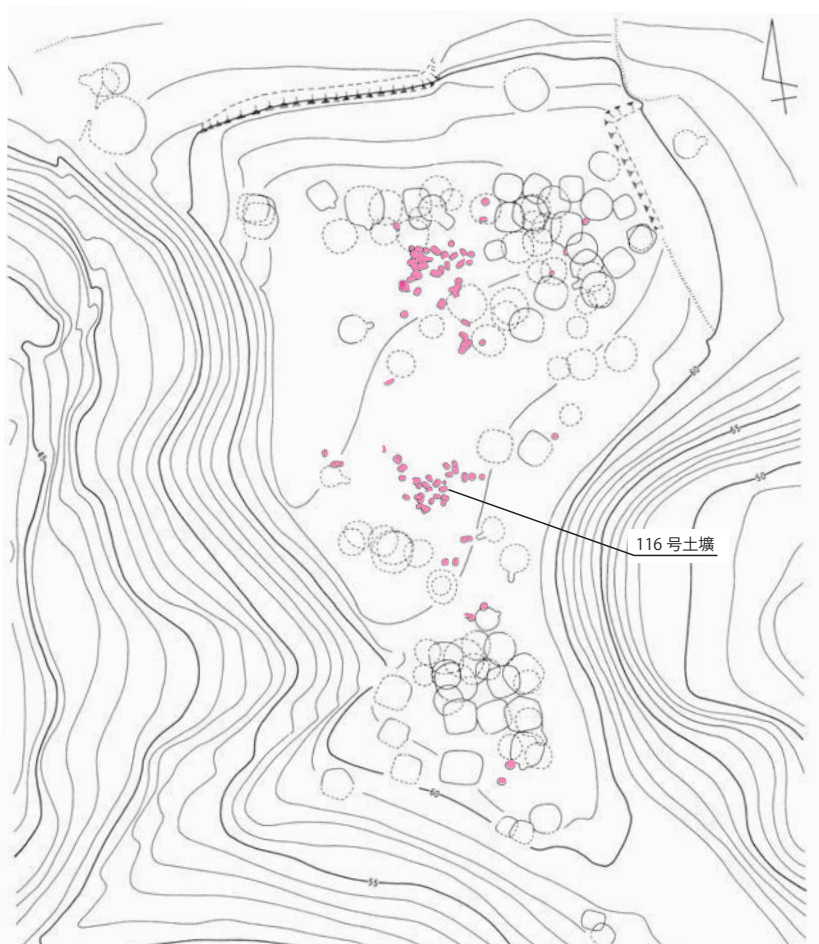


前高山遺跡 2号掘立柱建物跡



前高山遺跡 62号土壙

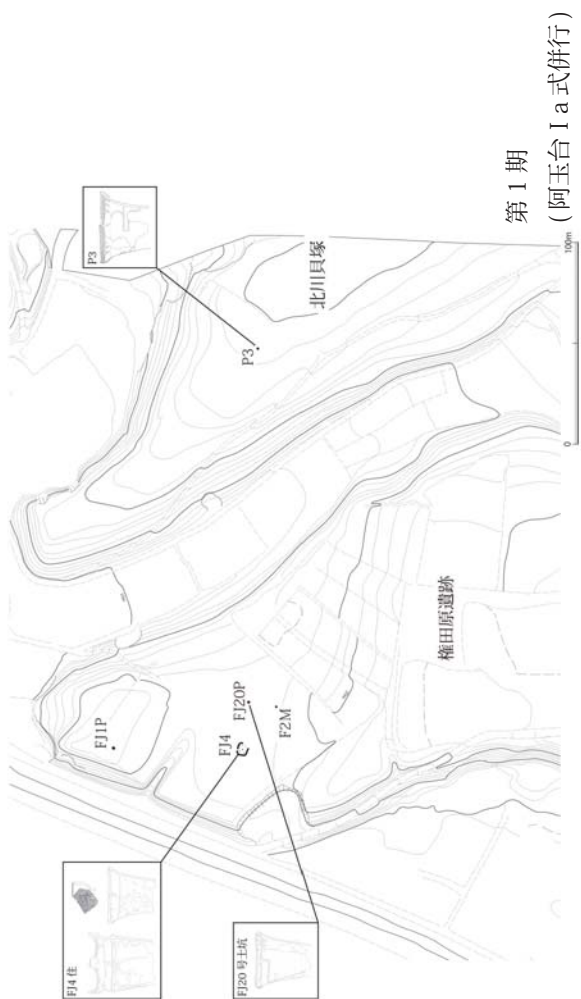
まえたかやま  
前高山遺跡遺構配置図



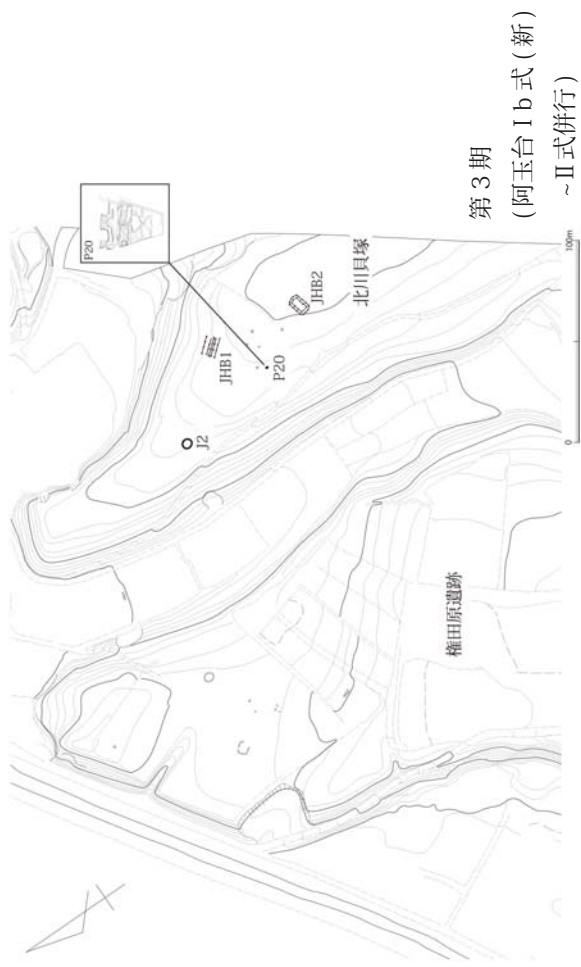
月出松遺跡 116号土壙

つきでまつ  
月出松遺跡遺構配置図

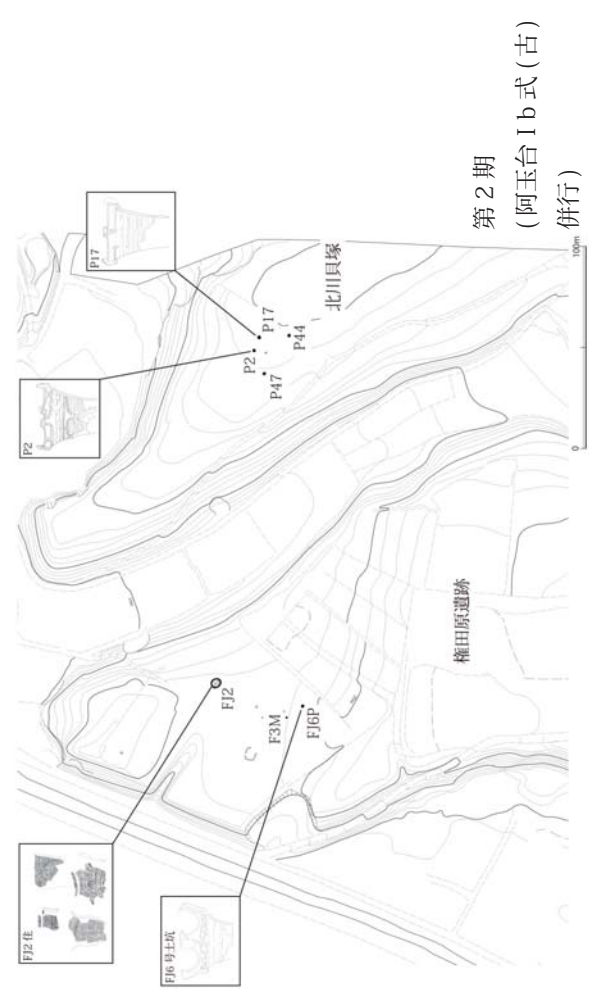




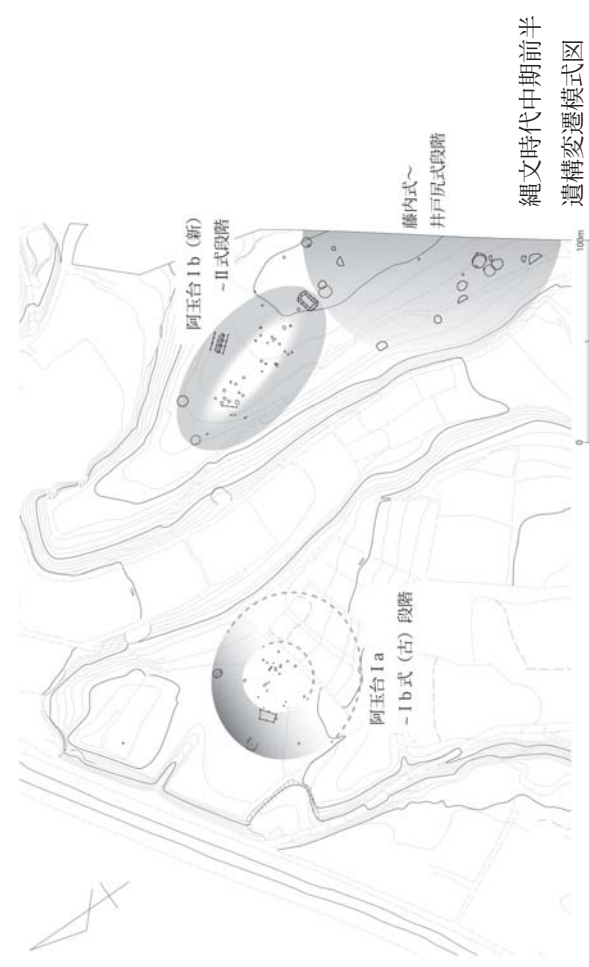
第1期  
(阿玉台 I a 式併行)



第3期  
(阿玉台 I b 式 (新)  
~II 式併行)



第2期  
(阿玉台 I b 式 (古)  
併行)

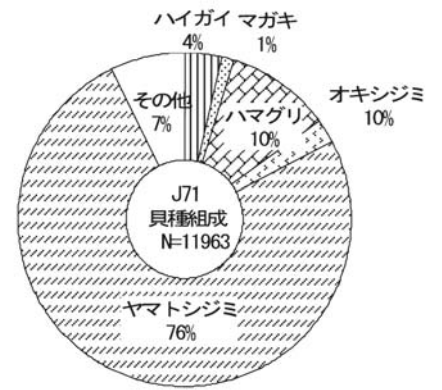


縄文時代中期前半  
遺構変遷模式図

権田原遺跡・北川貝塚における阿玉台式土器群の動態



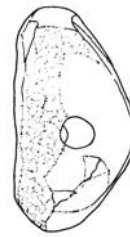
廃屋墓 (北川貝塚 J71 号住居址)



北川貝塚 J71 号住居址  
貝類構成比率 (中村 2007)



大熊仲町遺跡 出土石器



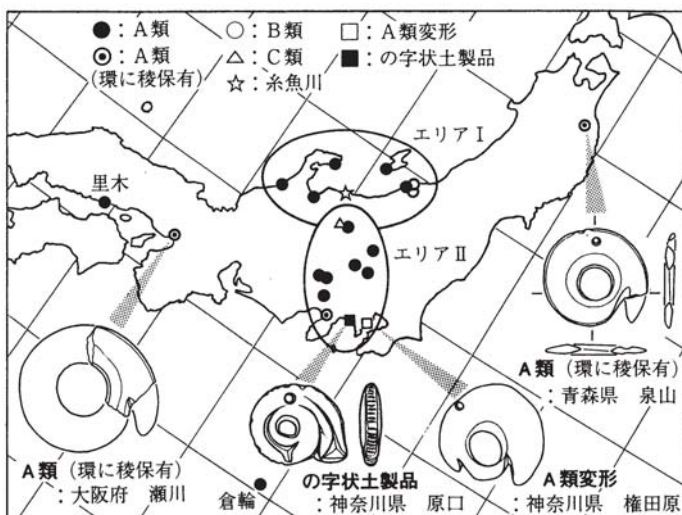
大熊仲町遺跡出土 翡翠大珠  
(横浜市歴史博物館所蔵)



権田原遺跡 FJ4 号住居址

遺跡名	帰属時期	神津島	星ヶ塔	畑宿
権田原	阿玉台 I a 式/勝坂1式	196	10	0
権田原	中期前半	2	0	0
加賀原	勝坂末	3	1	0
加賀原	加曾利 E I ~ II	28	7	1
加賀原	加曾利 E III	3	1	0
加賀原	加曾利 E IV	7	19	0
権田原	加曾利 E 式終末	1	5	0

黒曜石時期別産地 (三浦ほか 2012・新免ほか 2016 をもとに作成)



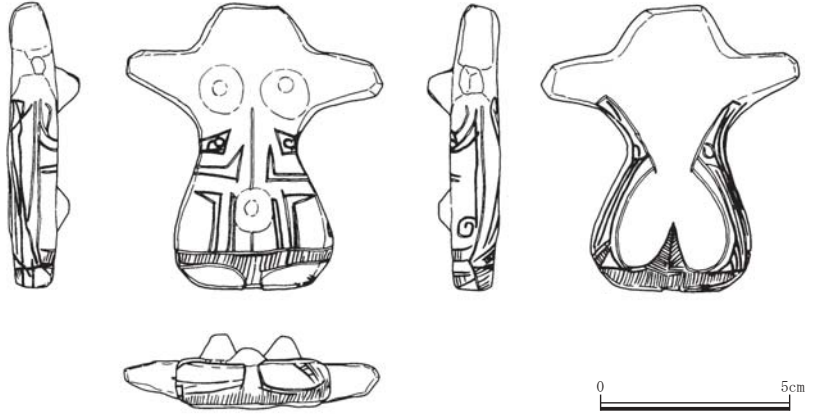
「の」字状石製品の分布 (前山 2004)



権田原遺跡 FJ42 号土坑出土  
(横浜市歴史博物館所蔵)

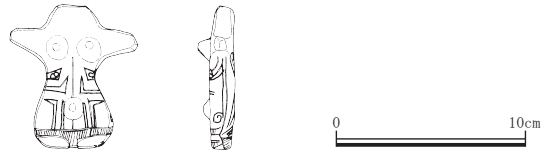


大熊仲町遺跡 J51 号住居址土偶

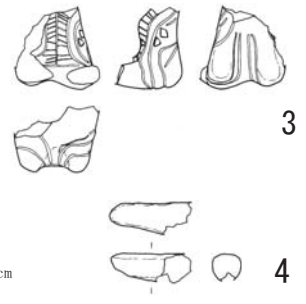
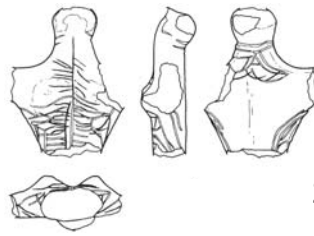
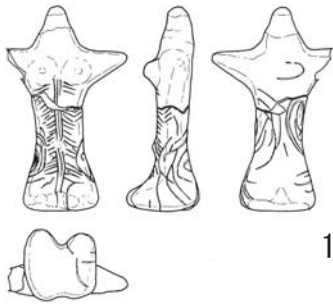


左図：長野県茅野市棚畑遺跡 500 号土坑出土土偶  
(茅野市教育委員会 1990 『棚畑』)

下図：横浜市都筑区大熊仲町遺跡 J51 号住居址出土土偶



縄文時代中期前半と後半の土偶の比較



月出松遺跡 J93 号住居址土偶



月出松遺跡  
J93 号住居址  
土偶 1 下半身  
出土状況



大熊仲町遺跡 J40 号住居址 岩偶

## 用語解説

かつきか  
勝坂式土器 : 神奈川県相模原市勝坂遺跡から出土した資料をもとに設定。縄文時代中期前半に関東地方西部から中部地方にかけて分布。装飾され、立体的な把手とってが特徴で、土器の表面には粘土紐を貼りつけて区画されたなかに、工具を使用して連続的に突き刺したり、押し引いたりした文様がみられる。

おたまだい  
阿玉台式土器 : 千葉県香取市阿玉台貝塚から出土した資料をもとに設定。縄文時代中期前半に関東地方東部を中心に分布。扇のような突起や、山のように張り出した口縁こうせんがつくられ、胴部には土器を成形する際、粘土を積み上げるときにできた圧痕を残したような手法がみられる。

かそり  
加曾利E式土器 : 千葉県千葉市加曾利貝塚E地点から出土した資料をもとに設定。縄文時代中期後半に関東一円を中心に分布。口縁部には粘土紐による渦巻や「S」字を寝かせたような文様がみられ、胴部にはまっすぐ、あるいは蛇行した粘土紐などが底部に向かって施されている。

ふくど  
覆土 : 竪穴住居などの遺構が廃絶し、自然に埋没したり、人為的に埋め戻したりするなどして堆積し、覆われた土の総称

うめがめ  
埋甕 : 埋設された土器の呼称として使われるが、ここでは住居跡の入口部分とされる床面に埋設される施設について述べる。縄文時代中期後半からみられ、埋設される土器は完形品が少なく、器体を打ち欠くなど、再加工される事例が多い。幼児埋葬や胎盤収納などの説がある。

えかがみがたしきいし  
柄鏡形敷石住居 : 縄文時代中期後半から後期にかけてみられる住居跡の一つ。外形が柄鏡に似ており、柄にあたる部分の先端が入口とされている。床面には扁平な石や小さな礫が敷かれ、一部に石棒せきぼうなどを立てる事例もある。焼かれたり、細かく割れた石棒が出土するなど、祭祀との関連性が考えられる。

けいこう  
蛍光X線分析 : 資料にX線を照射すると、その元素特有の蛍光X線を放射することから、あらかじめ測定しておいた原産地の分析データと対象資料の照射データを比較することで産出地を特定することができる。